ジョセフ B.コーネル氏の思想形成過程について

社団法人日本ネイチャーゲーム協会常務理事
日本体育大学教授
小　泉　紀　雄

はじめに

本研究は「自然保護・野外活動系環境教育の学習過程に関する理論的・実証的研究」と題する研究の一部「Ｊ．コーネルの思想形成過程について」を元にまとめたものである。

コーネル氏の著書「ネイチャーゲームⅠ」（原題：Sharing Nature with Children）は、1978 年に米国で初版が出版され、日本では日本ナチュラリスト協会によって 1986 年に翻訳出版されて以来、1997 年に社団法人日本ネイチャーゲーム協会が設立されるなど、日本の自然保護や野外活動系環境教育活動の一端を担うバイブルとして広く普及されてきている。日本においてこの様な確固たる普及が実現し教育効果が得られている背景には、ネイチャーゲームのコンセプトが現代社会に生きる日本の人々が抱えている環境不安や次世代を担う子供たちの教育に対する意識変容と同調したことの表れとも受け取れる。

ネイチャーゲームの本質を探ることも重要であるが、ここではネイチャーゲームの創始者であるコーネル氏自身の生い立ちと、シェアリングネイチャー思想の形成過程について、インタビュー調査を基に報告をまとめる。

１幼少期

ジョセフ B. コーネル氏は、1950 年カリフォルニア州北西の小さな町ライブオークで父ウッドローと母ヘレンの間に三男として生まれた（兄弟は兄２人弟１人）。5 歳頃父親が自営業を始めたため、一家は近くのユバシティへ移り住んだ。この一帯は、シエラネバダ山脈から太平洋へ流れるフェザーリバー、ユバリバーなどに育まれた草原や肥沃な湿地が広がり、有数の渡り鳥飛来地として知られ、野生動物の多さからアフリカのセレンゲティ大草原に例えられている。幼少期の自然体験について、コーネル氏は以下の様なエピソードを語っている。

ユバリバーは 20 世紀初頭まで頻繁に洪水を起こしており、コーネル氏も５歳の時に家屋が流されるほどの洪水を体験した。いかだで行き来した思い出について「幼かったので冒険気分を味わった」と回想している。

少年の頃は、週末に叔母が経営する牧場へよく出かけ、乗馬したり雄牛の後ろから忍び寄って尻尾で遊んだり、小鳥を眺めたりして、自然にとっぷりと浸かった。余暇には家族でラッセン国立公園やヨセミテ国立公園に出掛け、父親や叔父たちが釣りやシカ狩りをする際には渓谷や静かな山中へよく連れて行かれた。また毎朝６時頃に起きて１人で日の出を見ながら原野や川を走り抜ける日課を持っていた。目覚めの時を迎えようとする大自然の中で１人になり、カモやガチョウの大群が大地を揺るがさんばかりの轟音とともに飛び立つところを見たり、コヨーテやジャックウサギなどに出会うなど、「周りで息づくすべての命の存在を全身で感じる経験」をしていた。

コーネル氏の自然への思いは、家族と自然の中へ出かけて過ごした余暇や日常的に身近な自然に親しんだ経験によって育まれたと言える。

２.青年期

1960 年代当時、青少年は野球などのスポーツを楽しむのが通例であり、コーネル氏も他の青少年と同じように抜群の運動能力を持ってスポーツに親しんでいたが、16 歳の頃、高校の教師からヘンリー・デービッド・ソローの著書「ウォールデン」を読むように薦められた。

アメリカの自然保護運動の精神的基盤となったソローの文学的思想を、コーネル氏は自然に受けとめ、間もなくソローの著作を読破したという。コーネル氏は「自分では気づいていなかった性分を教師が見抜いたのではないか」と語っている。この頃からコーネル氏は自然の中で１人で過ごすことを通して「自分が何者なのか」、自然の純粋さや静寂の中で過ごすことによって「真実を理解できるのではないか」、また、「人生のあり方」や「真実を知りたい」と考えるようになった。そうした意識はとても重要な自覚であったと回想している。

短期大学在学中（18～21 歳 1968～1970 年）は、ベトナム戦争（1960～1975 年）に反対して「Students for Peace（平和を指示する学生の会)」という団体を立ち上げ、演説や小規模ながら反戦の行進をした。コーネル氏は学生であったため徴兵を免除されていたが、世界平和実現を信じて抗議行動をしていたと言う。それは一般的に報道されていたような怒りをあらわにしたデモ行進ではなく、少人数で集まって静かに話し合ったり、町役場の広場へ 80 人くらいで集って数日間ロウソクを灯して静かに座り込むといった活動だった。

３．思想形成期

（１）国際関係学とビスマルク

短大で一般教養を修了したコーネル氏は、1973 年にチコ大学３年に編入し、国際関係学を専攻した。当初は世界平和の実現を目指し、国家の機能について理解しようと履修したが、18 世紀ドイツ（プロイセン）の政治家、ビスマルクの言葉「戦争には反対だが、母国が戦争で得られる利益を確実に得るようにしたい」という一文に出会い、ふと、人を集めて「皆で平和を実現しよう」と訴えても効果がないことを理解したと述べている。

人がそれぞれ異なることに関心を持つことは、人間の本性であって、正論をかざすだけでは変えることはできない、すなわち世界平和を訴えても世界は平和にはならないと悟り、正論の主張を自省したのである。そして自分の根源となる信念にもっと集中し、考えを深めて立脚点を持ってから、それを人とわかちあえばよりパワフルに伝えることができ、指導者はより効果的に主張を伝えることができると考えたと言う。

（２）シェアリング ネイチャーの思想へ

国際関係学に行き詰まりを感じていたコーネル氏は、大学キャンパス内で自分を取り囲んでいた自然からとてもダイナミックな平和と平穏を感じる経験をした。この頃「自然には本当の平和が実在し、それは人の心に深く触れることができること」に気づき、「もし人と自然に存在する平和をわかちあうことができたら、本当の意味で人々に自分の心の中の平和を感じてもらえる」「本当の平和の中で生きることを体験させてあげられたら、その人は平和の中で生きたいと思うようになる」という考え方、それが人の心を魅了するであろうことに気づいた。また「その体験は、根本的に１人１人が体験しないといけない」と考えたのである。そして「これこそ、自分が人に与えられることだ」と思うようになり、それを１番効果的に実行できるの

は自然の中であると考え、シェアリング ネイチャーの思想の出発点を見出したのである。

（３）国際関係学から自然認識学へ

大学４年に進学する際、コーネル氏は「既存の学部に学生自身が学びたい科目がない場合には、自分で履修科目を選べる」という「特殊専攻（Special Major)」に転科し、卒業まで更に２年間在学することになったのである。「特殊専攻」を履修する学生が科目を独自に決める際には、選ぶ理由やコンセプトが道理にかなっていること、研究目的に対応する科目を履修すること、学部長の審査、面接を受けて認められること、研究目的に沿った科目の教授が担当教官としてつくこと、といった条件があった。コーネル氏はチコ大学で「特殊専攻」を選んだ最初の学生であり、この時「自然認識学（Nature Awareness)」という新しい分野を自ら想定した。この言葉は「自然の中に神を見出すこと」と言い換えることもでき、ここでいう「神」とはキリスト教のそれとは違い「もっとも崇高な命の真実（the highest truth in life)」という意味であると説明している。当時は技術者指向が強く、ほとんどの学生は科学的な研究者を志望していたが、コーネル氏は「自然認識学」を探究すべく地形学や考古学、生態学、鳥類学などの他、科学以外の学部や大学院でアメリカ先住民に関する授業やネイチャーフォトグラフィー（自然の写真)、超絶主義の文学作家などの科目も履修した。卒業論文は必須ではなかったため、執筆されなかったことは大変残念なことである。

（４）環境教育の創造

1970 年代初頭当時は環境教育という分野が認知されておらず、自然保護教育が唯一環境に関する情報を学ぶ教科であった。チコ大学は学生が環境教育の授業をクリエイティブに創造する科目を設け、学生は自ら創造する熱意と興奮をもって模索した。先進的な環境教育を進める上でコーネル氏が強い影響を受けたトーマス・ロジャース教授は、後に「ネイチャーゲーム１」を出版する資金を提供したそうである。コーネル氏と共に学生時代を過ごした人には後に偉業を成し遂げた人が多く、「ネイチャーゲーム４」（Listening to Nature）の写真家、ジョン・ヘンドリクスもその１人である。

４．社会的活動期

（１）オーデュボン協会のネイチャーセンター

コーネル氏は 1973 年の初夏にチコ大学を卒業し、その年の秋から翌年までの４ヶ月間、オハイオ州のデートン・ネイチャーセンターでインターン（研修）を経験している。当時のアメリカでは環境教育の分野で行われていたインターンシップ・プログラム（研修制度）は２つしかなく、１つは全米オーデュボン協会のネイチャーセンター、もう１つはオークランド市近郊のイースト・ベイ・パークで実施されていた。コーネル氏はオーデュボン協会の研修を受けたいと強く要望し、20 人もの人に推薦状を書いてもらって、４つあったオーデュボン協会のネイチャーセンターそれぞれに応募したところ、生物学専攻の学生が 299 人も応募するという大変な難関であったにも関わらず、全てのネイチャーセンターで抜擢されている。

コーネル氏が選んだ、デートン・ネイチャーセンターは、主に技術的なことを中心に知性的なこと指導していた一般的なネイチャーセンターと違い、スタッフが愛情を込めた教え方をしており、指導技術にも優れ、心の重要性についても深く理解して指導していた。

（２）ネイチャーゲームの誕生

インターンとして経験した諸活動の中で、オハイオ州イエロー・スプリングスにあるグレン・エレン野外教育センター（Glen Elen Outdoor Education Center）のプログラムはとても革新的で、コーネル氏にとって刺激となり、強い関心が寄せられた。中でもゲームを使ったプログラムは、コーネル氏に「ゲームには人の注意を惹きつけたり、グループに熱意や意欲を湧かせる可能性がある」という特質に気づかせた。コーネル氏はこの時ゲームについてよく学び、オリジナルのゲームを創作し始めたことがネイチャーゲーム誕生の発端となったのである。

「ネイチャーゲーム１」には当時のグレン・エレン野外教育センターで開発されたゲームについて引用許可を得て、アクティビティ＜カモフラージュ＞や＜フクロウとカラス＞を掲載している。

（３）ボーイスカウト協会と指導者養成

その後、コーネル氏はオハイオからカリフォルニアに戻り、1973 年～1978 年の夏期をシエラ・ネバダ山中の高地にあるボーイスカウト協会のキャンプ場でナチュラリストとして働いたり、ウッドリーフ野外教育プログラムの（生態保護ディレクター(Ecology Conservation Director)として環境教育の指導した。

コーネル氏の指導するプログラムは当時特異であったため多くの人の関心を惹き、全米キャンプスクールでキャンプ・ディレクターやプログラム・ディレクター、運営スタッフなどの指導者研修を担当するなど、間もなくアメリカにおける野外教育に大きな影響を与えるようになっていたのである。

５．メディテーション（瞑想）との出会い

（１）スピリチュアルな体験

コーネル氏が幼少期から自然との一体感を強く実感して成長したことは前述のとおりである。若い頃から自然の中を歩くとき、コーネル氏は木々や水平線に自分を感じ、自らのエネルギーやオーラが自分の周りを囲んでいること、周りのものにもエネルギーがあることを感じることができたとしている。また人が自然に関心を持つのは自然のエネルギーを自分の中にも感じるからであり、コーネル氏は子どもの頃からそうしたエネルギーをもっと感じたいといつも思っていたのである。16 歳の頃からソローの著作を読み進め、自然の中で深い静寂を体験するようになったコーネル氏は、18 歳の頃にはメディテーションをする必要があると理解していたという。

学生時代に自然の中でとてもダイナミックな平和と平穏を感じた体験について、コーネル氏は「スピリチュアルな体験と言える」としており、スピリチュアルな体験について強い関心を持って調べてみると、「思考を受容的にすることによって」そうした体験ができることがわかるとともに、それがメディテーションであり、自分が求めているものはまさにそれであると理解した。

1971 年にチコ大学の近くで始めてメディテーションを習い、その前後数年間は様々な瞑想方法を探究している。禅の瞑想方法を学ぶためにサンフランシスコ郊外にある曹洞宗の禅寺に滞在して老師の思想を学び、２年ほど座禅を日常的に実践していた。

1974 年、１人でヨセミテ渓谷を訪れたコーネル氏は、湖や山々と一体になっている感覚を味わい、何とも云えないスピリチュアルな体験をした強烈な印象を心に留めている。

（２）アナンダ思想（クリア・ヨガ）との出会い

コーネル氏は大学を卒業する前後頃から人生を通してメディテーションをして過ごせる所に住みたいと願うようになっていたコーネル氏は、大学近くの自然食品店でアナンダ村の創始者スワミ・クリアナンダの著書に出会い、インドのヨガと西洋のキリスト教思想の融合であるアナンダの思想を知ったのである。

当時のアナンダ村は創設後間もなく、100 人程度の住人は若い人が中心で、長時間にわたるメディテーションをしながら、村の開拓のために設備を整えるなどよく働き、とても強固で理想的な精神があったようである。コーネル氏は1973年に始めて短期間アナンダ村を訪れ、1975年にアナンダ村こそ自分が居たい場所であるという自己認識に至って移り住み、村のメンバーとなった。以来、アナンダ村のコミュニティづくりに尽力し、メディテーションの技術を深めながらアナンダ思想を広め、2002 年にはクリア・ヨガの導師となっている。

６．ネイチャーゲームの執筆と世界的普及

コーネル氏は、アナンダ村へ移って１年後くらいから「Sharing Nature with Children」を執筆し、1978 年に出版されているが、執筆や出版にあたってはアナンダ村の人々の深い理解や多くの協力を得、資金的な面も合わせてアナンダ村の後押しがあって出版されたと述べている。国際的な展開としては 1981 年にイギリスへ５週間、オーストラリアに５週間滞在して普及活動をしたのが最初であるが、その後数年は特に大きな変化はなかった。しかしこの間コーネル氏の著書は 15 カ国語に翻訳され、1980 年代後半から国際的な展開が見られるようになった。初来日されたのはそんな折りの 1986 年である。以来 20 年近くネイチャーゲームの普及のため世界中の国を訪れ、2001 年にはメイン州のユニティ大学(環境に関する専科大学)から博士号を、2003 年にはヨーロッパにおける環境教育賞であるソーニャ賞を授与されている。

おわりに

コーネル氏はネイチャーゲームのコンセプトとして、インドの導師、パラマハンサ・ヨガナンダの教えから次のような言葉を引用している。「直感は魂の知識であり、私たちは直感を通してでなければ、何事についても本当に学ぶことはできないのです」また、「科学は物事を説明しますが、直感を使えば理解することができます。科学は知覚を通して物事を把握しますが、すべてのものは魂（スピリット）のレベルでつながっているので、自然を理解するためには、魂を通して知る必要があります」

私たちは自然の中に存在するすべてのものについて生命あるものとして受容するとともに、それらと調和しながら一体感を感じる必要があり、その感性を高めるためのあり様を認識していかなくてはいけないと言える。そのためには「自然をどのように認識しているか」を把握、研究する必要がある。コーネルは「人は意識が向上すると、物事の認識の仕方が変わり、認識が変わると、とる行動が変わる」としている。

コーネル氏の思想形成に関する研究はまだ始まったばかりで、とてつもなく奥が深く、今回の研究報告では十分なものとは言えないため、まだまだ研究課題が残されていることを付しておくものとする。

謝辞：本研究は、平成１６年度科学研究費補助金「自然保護・野外活動系環境教育の学習過程に関する理論的・実証的研究」（課題番号１５５００５７６）の一環として行なったものである。本研究にあたり、研究代表者の朝岡幸彦東京農工大学助教授、長時間のインタビュー調査に協力いただいたジョセフ B. コーネル氏、インタビューテープからの翻訳作業や校正をいただいた岡部世良氏をはじめとする関係の皆様に感謝申し上げたい。

参考資料および文献

１）コーネル氏インタビュー　アメリカ　カリフォルニア州アナンダ村　於コーネル氏宅
訪問者：小泉紀雄　降旗信一　石崎一記　　2004 年 1 月

２）Reflections on Living　30 years in a Spiritual Community, Interviews with Members of Ananda Village; by Sara Cryer 1998, Crystal Clarity Publishers